Butterflies Newsletter No.81

The Butterfly Society of Japan　日本蝶類学会

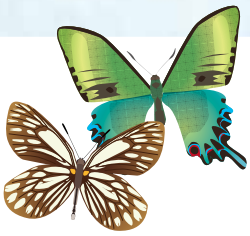
▲道東の “股白ウスバシロチョウ”　*Parnassius citrinarius var.*

通常ウスバシロチョウの後翅1a室は黒い縁毛で覆われて黒いが道東厚岸南端のあやめが原産のものは後翅1a室が白いいわゆる「股白」と呼ばれる個体変異が約10頭に1頭の割合で見つかる。あやめが原以外でも道東の一部で稀に見つかることがある。

北海道河東郡鹿追町　14. Jul. 2020　撮影：菱川法之

バタフライズニュースレター　81号
March, 2021

読書案内　Book Review



評者・文責：斎藤基樹

コロナの感染拡大で巣籠もり生活が続いている方もおられるかと思います。そんなときには読書が一番。最近出版された書籍をいくつか紹介します。

タイの自然と蝶

岡本眞一・青木俊明・山口就平

ぱるす出版
ISBN978-4-8276-0252-4
3,600 円（＋税）

東南アジアのタイは古くから日本との関わりも深い。東南アジアに蝶を求めて出かけた人の中でタイに行ったことのない人はほとんどいないのではないだろうか。実際に現地に行かなくとも、多くの標本がこれまでに日本にもたらされ、皆さんのコレクションの中にもいくつかは収蔵されていることと思う。

タイの蝶についての図鑑はこれまでにも多くのシリーズが出版されてきて、蝶相はかなりの部分で把握されてきている。記録されているのは1,300種程度と、日本の5倍もの豊かな蝶相を擁している。国土が南北に拡がっていることから、北部はインド・アッサム系、南部はマレー系と種の構成は多彩である。

そんなタイの蝶をフィールドガイドとしてコンパクトにまとめたのが本書である。主著者の岡本氏は大学教授として長年タイを訪問し、その傍らで各地を訪れて蝶の撮影を続けてきた。カバーしている範囲はタイの東西南北に幅広く、その結果、撮影し図示された種は500を超えている。かなりの珍稀種以外ベーシックな種はほぼ網羅されていると感じるし、中には野外で出会うのが相当難しい種も含まれている。膨大な岡本氏の生態写真をもとにタイの蝶のエキスパートである進化生物学研究所の青木、山口両氏が共著者として参加しているので各種の同定は極めて正確である。

本書のもっとも優れた点として撮影好適地のガイドが丁寧に説明されている点をまず挙げたい。タイを大まかに5つの地域に区分した上で、それぞれの地域の特色や国立公園についてまとめられている。タイに初めて行く人でもこの本を持って行けば、どこに行けば効率的に蝶に出会えるのか明快である。風景写真も可能な限り掲載されているので、北部の山岳地帯に展開している深い雲霧林から南部のリゾート気分が満喫できるビーチに至るまでタイの多様な自然環境をビジュアルで学ぶことができる。

一方、本の体裁上仕方のないところもあるが、画像がやや小さく、種によっては判別が難しい点と、大きさ・色・翅型などのキーをもとに検索できるような作りになっていれば、よりフィールドガイドとして有用になったのではないかと感じた。

タイ、もしくは周辺国に訪れる時に旅行カバンに入れておいて損はない一冊だと思う。

ブルネイの蝶　仁坂吉伸

NRC出版
ISBN978-4-600-00580-1
10,000 円（＋税）

個人的にアジアの中で比較的マイナーな国を“3B”と評していて、何故か分からないがそのいずれの国にも足跡を記したばかりか、人生でそれなりに浅からぬつながりを持ってしまった。要は自分自身が異端でマイナーな存在であるということの証左かもしれない。Burma（Myanmar）、Bhutan ときて、最後のBはBangladeshではなくBruneiである。

ブルネイはボルネオ島の北部、マレーシアのサラワク州に隣接する小さな国である。面積は日本の三重県ほどしかない。この国を有名にしているのは豊富な石油と天然ガスの資源で、「お金持ち国家」としてその名は世界に轟いている。資源に恵まれたことで、農業や林業が発達しなかったため、ボルネオ島全体を見るとかなり失われてしまった低地熱帯林がよく残っている。このため低地性の興味深い種が生息している。

著者の仁坂吉伸氏は現在和歌山県知事。行政の長として新型コロナウイルス対策では科学的なエビデンスに基づく封じ込め対策を的確に行うとともに、県民への情報公開等を丁寧に行うことで、そのリーダーシップと活躍ぶりは全国に知られるところとなった。その仁坂氏のもう1つの顔は生粋の昆虫好きだ。2003年から2006年までの3年間、ブルネイ大使として現地に赴任した。これまでの日本からの大使がみな週末はゴルフに興じるところを、仁坂氏はネットを担いでジャングルに通い続け、現地では「バタフライ・アンバサダー」として有名になったと聞いた。現地当局の許可を得て採集した資料のうち、博物館に寄贈したものを除いて整理ができた分について、2014年から季刊「ゆずりは」で「ブルネイの蝶」と題して連載を始めた。連載はアゲハチョウ科から始まってセセリチョウ科に至るまで6年の歳月をかけて完結し、そのリストを1冊にまとめたのが本書である。

ブルネイの蝶についてはイギリス人のAlan Cassidy が1980年代に発表したチェックリストを除いてはまとまった記録が無く、本書ではCassidyの記録に加えてブルネイ大学とブルネイ博物館のコレクションにもあたっているので、まさに「ブルネイの蝶」の決定版といって過言でない重要な文献となっている。巻末のチェックリストによればこれまでにブルネイで記録されたのは663種にのぼり、このうち仁坂氏はじつに8割を超す531種を採集・確認されている。この成果は驚異的で、特に小型のシジミ、セセリでは多くのブルネイ初記録となる種や有名な珍稀種（イノレスボルネオフタオシジミ*Sukidion inores*などが代表格か）もものにされている。本書の賞賛すべき点は簡潔にまとめると以下の点に集約される。

- 記録の少ないブルネイの蝶相をビジュアルで俯瞰できる世界初の大著である
- 多くのブルネイ初記録種を含むとともに見るのも難しい珍稀種が多く掲載されている
- 種の同定は各分類群のエキスパートに依頼しているため信頼が置ける
- 図示された標本のほぼすべてが仁坂氏本人の採

集品なのでデータが極めて正確
- 種解説の記述は文献の孫引きがほとんどなく、著者による生態の観察記録
- 挿入されているコラムが読み物として優れている

上記について1つ1つ詳細に説明していくには紙幅が足りないが、いわばアマチュアの研究家が夢見る出版物の1つの極致ではないかという感想を抱いた。強いて言えば、ブルネイの各採集地の環境写真が地図とともにもう少し見やすく整理されていれば参考になる点も多いと思われることや、珍稀種や注目種については交尾器の図示もあった方が研究の役には立つのではないかとも感じたが、単に標本図版を眺めていて楽しく、読んでいて面白いので、これで良いのではないかと思い直した。

最後に私事になるのだが、仁坂氏が「季刊ゆずりは」に連載の構想を抱いていた前後に、まるで「飛んで火にいる夏の虫」そのものの状態で和歌山に赴任することになったのが評者の私だった。ある時「標本写真撮れますか?」と仁坂氏に頼まれて安請け合いしたのが運の尽き。それから春夏秋冬延々と膨大なコレクションの撮影に通うことになったのが懐かしくもちょっと苦い思い出。標本写真を背景処理するのが遅れていると、「そろそろ次のシリーズを出したいのですが」「もうテキストは出来上がっているのですが」という催促の連絡が入ってきて何度肝を冷やしたことか。当初は「季刊ゆずりは」主宰の杠隆史さんが写真撮影に通うとおっしゃっていたようであるが、標本撮影をすべて担当した身だから断言するが、大阪から数回通って撮影できる量ではなかったことだけはそっと呟いておきたい。

月刊むし
昆虫図説シリーズ 14
日本のゼフィルス

長谷川大
編著・英訳・監修：高崎浩幸・矢後勝也

むし社
ISBN978-4-943955-54-2
7,800 円（＋税）

凍てつく冬の森の中は静寂に包まれている。朝からいくつの休眠芽を探したことだろう。いくら探しても目指すものは見つからない。先ほど昼食を食べて少しは温まった身体もすぐに冷え切ってしまった。貴重な休日に、いい歳こいた中年男が何が楽しくて独りでこんな苦行を続けているのだろうか。傍から見たら変質者か自殺志願者にしか見えないのではなかろうか。バカバカしくなって、もう止めようと思った瞬間、休眠芽の付け根に白くて丸いものが浮かび上がる。眼をこすって凝視すると、間違いなくそこにはゼフィルスの卵。先ほどまでの陰鬱な気持ちはいっぺんに吹き飛び、思わず森の中で独り歓声を上げる。

日本に25種が分布する、森の宝石・ゼフィルス。蝶を好きになった人で、この魅力的なグループに一

時でも心奪われなかった人はほとんどいないのではなかろうか。盛夏の森でつなぎ竿を手に梢を叩き続けたり、厳冬期に越冬卵を採集しに森に分け入ったり、日本の愛蝶家のゼフィルスにかける情熱には凄まじいものがある。国内産の生態解明はヒサマツミドリシジミをもって完了したが、その後は台湾、中国、インドシナ、アジア各地へとその活躍の場を拡げ、多くの新種・新亜種の記載、幼生期の解明が日本人研究者によって成し遂げられてきた。その集大成とも言えるのが小岩屋敏氏による2007年の「世界のゼフィルス大図鑑」(むし社)であることに異論を唱える人はいまい。これまでに記録された全種を図示し、詳細な分類学的再検討を加えた大著は日本におけるゼフィルス研究の水準を高さを強く印象付けた。

この記念碑的な大著から13年。ゼフィルス研究に必携の書が新たに刊行された。主著者は当会理事でもある長谷川大氏、共著者もみな当会の関係者である。ヒサマツミドリシジミの生態解明が報告された年に生まれた長谷川氏は、大学生の時「ゼフィルス研究会」を立ち上げるなど生粋のゼフィルス好きとして知られる。成虫採集、採卵などフィールドでの圧倒的な探索能力と幅広い自然史の素養を兼ね備えた研究者で、ゼフィルス研究界隈ではいわば「若頭」として長らく活躍されてきた。今回、長谷川氏はこれまでの研究成果をまとめて「日本のゼフィルス」と題して本著を世に送り出した。一読して、この本は単に「日本の」という狭い枠に囚われない、ゼフィルス研究の基本書ではないかと感じた。その理由としてまず挙げられるのは、小岩屋氏のゼフィルス大図鑑の刊行後に新たに記載された種もほぼ網羅していることだ。日本のゼフィルスと銘打つのなら何もここまでこだわらなくても良いのではないかとも思うが、中々目にすることも難しいウラゴマダラシジミ属の新種ヒメウラゴマダラシジミ*Artopetes wangi*や、世界に僅かな標本しか現存しないと思われる台湾特産のジンピンオナガシジミ*Antigius jinpingi*、ミャンマー北部から得られ未だ世界にホロタイプしか現存しないと思われる長谷川氏らが記載したスキットオナガシジミ*Neoantigius sukkiti*、さりげなく世界初の図示となると思われるミヤガワミドリシジミ*Chrysozephyrus miyagawai*のメスなど目を奪われる標本がページをめくるたびに現われる。1ページに縦6頭、横4頭の計24頭で整然とまとめられたプレートは美しく、見ているだけで楽しい。テキストも必要な情報が簡潔かつ正確にまとめられていて、精緻なプロット図も併せて大いに参考になる。日本産全種のオス交尾器を深度合成技術を活用した高精細な写真で掲載しているだけでも素晴らしいのに、海外の注目種や近縁種まで可能な限り図示しているのは欲張りすぎではないかと思うほどである。また英文が併記されていることも大いに賞賛できる点である。これまで国内では数多くの素晴らしい知見を盛り込んだ図鑑や書籍が発表されてきたが、残念ながら日本語だけでは海外の研究者や愛好家がアクセスできず、せっかくの成果が世に知られないままになっている例が多い。本書のような優れた作品は海外にも届いて欲しいと願うのは私だけではあるまい。

かくのごとくあらん限りのヴォキャブラリーを駆使して賞賛するほかない稀代の傑作だと認めつつも、以下の2点について正直な感想を述べておきたい。1点目はもちろんページ制限もあったと推察されるが、生態写真や生息地の環境写真をもう少し見たかったことが挙げられる。こうした写真があれば、より立体的に日本のゼフィルスの魅力を掘り下げることができただろうと思う。2点目は宇野彰氏による「ゼフィルス関係人物略歴」で藤岡知夫氏に触れられていないことも気になった。藤岡氏は当会の設立初期に会誌に「世界のゼフィルス」を連載されており、多くの新種記載も行っている点で我が国のゼフィルス研究史において傑出した存在であることに異論はないものと思う。本書に掲載された標本の多くも藤岡氏のコレクションであることを加味しても若干の違和感を覚えた。

ともあれ、ゼフィルス研究の若頭として活躍してきた長谷川氏も既に中年となった。これからさらに研究を深めて、いずれは本書をさらにボリュームアップした「日本と世界のゼフィルス」の大著を世に送り出してほしいと切に願うものである。

【重要連絡】　会員の皆様へ

2021年3月吉日　会長　菱川法之

早いもので今月末には桜の便りが届く季節になりました。会員の皆様方におかれましては、希望に満ちた新年を迎えられ、充実した毎日をお過ごしのことと存じます。昨年は日本にとっても世界にとっても例をみない激動の年となりました。新型コロナウイルスの蔓延で、これまでごく当たり前だったことが、ことごとく音を立てて崩れ去っていくのを目の当たりにしました。先日、首都圏以外に出されていた緊急事態宣言こそ解除されたものの、東京では連日3桁を超す新規感染者が報告され、世界的な感染状況を見ても新型コロナウイルスの収束は未だ見通せない現状にあります。

こうした中、当会の活動も昨年は大幅に縮小せざるを得なくなりました。中でも最大の痛恨事は総会・大会の中止でした。会員の都道府県をまたぐ移動を伴い、かつ講演会場には100人を超す多くの参加者が密集し、さらには懇親会で至近距離で多くの会員が飲食を共にしながら懇談するという形式での総会・大会は感染リスク低減の観点から中止せざるを得ないという結論に達しました。今を遡ること13年前の2008年に現在会務を担当している役員・委員の多くが就任して以来、海外からの参加者も含めて毎年参加者が100人を超える盛況の総会・大会となり、東京以外にお住いの会員の皆様からも年末に上京するのを楽しみにしているというお声をいただいていたので、今回の中止の決断は痛恨の一語に尽きました。新型コロナウイルスの感染が何とか早期に収束し、年末には再び従来のような賑やかな総会・大会が開催できますことを今は祈念するほかありません。

このような状態では、会員の皆様方から頂戴している会費に見合うだけの会員サービスを提供できていないという判断から、当会の財政状況も慎重に検討しながら理事会で議論した結果、2020年度にお納めいただいた会費につきましては、次年度・2021年度までの2年分に充当するという緊急措置を実施することになりました。ただし、この措置は2020年度分の会費に限るものとします。お納めでない会員の皆様は至急納入下さい。

幸いにして私たちが楽しんでいる蝶の世界は基本的には「三密」とは無縁です。少人数で、感染対策を徹底した上で移動し、フィールドで採集や観察を楽しむ分には感染リスクは極めて少ないものと思われます。免疫力アップも兼ねて、どんどんフィールドに出て成果を報告していただければと思います。忌々しい新型コロナウイルスの感染拡大が終息し、再び会員で集まって蝶談に花を咲かせることができる日が1日でも早く来ることを願っています。その日まで、会員の皆様方におかれましては、くれぐれもどうかご安全にお過ごしください。

【2021年度第一回理事会報告〈通信理事会〉】

新型コロナウイルス感染拡大のため、会則第18条3項に基づき菱川会長の判断で通信理事会を開催した。

- 日　時：2021年3月
- 参加者：役員＋監事
- 討議事項：以下の諸点について協議し、いずれも全会一致で承認された。

① 新型コロナウイルス感染拡大に伴う特例措置として2020年度会費の2年分充当
② 2020年度事業報告
③ 2021年度事業計画

①2019年度　一般会計収支実績（2019年1月1日～2019年12月31日）

	項　目	（内訳）	当期実績	（内訳）	前期比	前期実績	備　考
収入の部	会費		2,909,549		▲ 249,000	3,158,549	
	会誌売上		170,320		101,320	69,000	
	広告料		120,000		120,000	0	
	寄付		10,000		▲ 36,500	46,500	オークション売上等
	雑収入		18,200		▲ 16,300	34,500	別刷代
	預金利息		25		5	20	
	収入合計①		3,228,094		▲ 80,475	3,308,569	
支出の部	印刷費	（小計）	1,434,643		11,410	1,423,233	
	バタフライズ第80号			425,058	▲ 23,715	448,773	
	バタフライズ第81号			418,097	▲ 2,235	420,332	
	バタフライズ第82号			429,768	19,130	410,638	未払
	ニュースレター印刷費			161,720	18,230	143,490	
	その他			0	0	0	
	通信費	（小計）	375,217		75,914	299,303	
	郵送料			356,938	78,745	278,193	
	電話			18,279	▲ 2,831	21,110	
	その他			0	0	0	
	総会費		282,031		▲ 62,131	344,162	
	運営費		446,683		▲ 56,302	502,985	事務委託費40万円
	会議編集費		207,900		▲ 8,640	216,540	
	広告料		0		0	0	
	雑費	（小計）	78,232		20,703	57,529	
	金融機関手数料			75,733	20,765	54,968	
	消耗品費			2,499	▲ 62	2,561	
	その他			0	0	0	
	支出合計②		2,824,706		▲ 19,046	2,843,752	
年度収支③（＝①－②）			403,388		▲ 61,429	464,817	
前期繰越金④			7,959,134			7,494,317	
次期繰越金（＝③＋④）			8,362,522			7,959,134	

②2019年度　基金口収支実績（2019年1月1日～2019年12月31日）

	項　目	金額	備考
収入の部	前期繰越金	10,341,329	
	預金利息	84	
	合　計	10,341,413	
支出の部	一般会計への振り替え	0	
	次期繰越金	10,341,413	銀行普通預金
	合　計	10,341,413	

③資産明細（2019年12月31日現在）

1．一般会計

郵便振替口座	7,736,916	前受金（2020年度以降会費）	1,561,000
銀行普通預金口座	2,763,905	未払金（No.82印刷、郵送）	494,033
現金	118,572	事務委託費（2019/7-12）	201,838
		次期繰越金	8,362,522
合　計	10,619,393	合　計	10,619,393

2．基金口

銀行普通預金口座	10,341,413	次期繰越金	10,341,413
合　計	10,341,413	合　計	10,341,413

運営委員会からのお知らせ!

◆2020年度会費をお納めください！

当会の会計年度は1月から12月までです。前述しました通り、2020年度の会費は新型コロナウイルス特例措置で2年分に充当されます。事務局業務を外部委託しましたので、これまでよりも迅速に宛名ラベルの会費納入状況の更新が可能になっております。これまで「入金したのに宛名ラベルに反映されていない」事態が発生して会員の皆様にご迷惑をお掛けしていましたが、この点は改善されました。

◆公式ウェブサイト、ブログやTwitter でも情報発信中です！

当会の情報は公式ウェブサイト（「日本蝶類学会」で検索）、ブログ（「BSJ Blog」）、Twitter（bsj_t アンダーバーです）など複数のメディアで公開しております。ぜひ一度覗いてみてください。ブログは2012年に開設して以来、累計アクセスが75万を超えました。Twitterのフォロワーも順調に増加して現在2,500人超。じつに会員数の6倍超です。このところWEB展開が停滞気味ですが、再び積極的な情報発信に力を入れたいと思っております。WEB関係に詳しい会員の皆様のご協力もお願いします。次は女性層へのアピールを目論んでInstagramに進出しようかどうか、悩み中です。

◆新規会員の入会にご協力を！

日本の蝶界の高齢化に伴い、当会の会員数も減少傾向に歯止めがかかりません。幸いなことに新規会員の参加もあって、大幅減にはなっておりませんが、今後の見通しはまったく明るくありません。今後少しでも当会の活動が安定して続くためには会員増加が欠かせません。ご友人などでまだ会員になっていない方が身近におられましたら、ぜひ勧誘していただきたいと思います。新規会員には会誌のバックナンバーも入会特典として差し上げております。また、ニュースレターなどは会員勧誘用に無料配布分もありますので、お気軽に下記の事務局までご請求下さい。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【編集後記】

昨年暮れにはコロナ禍で総会・大会も中止になってしまい、当方も何だか気が抜けてしまったようでニュースレターも長らく冬眠してしまいました。これではいかんと思い直し、啓蟄も過ぎてようやく活動を始めました。都道府県をまたぐ移動も自粛を要請される中ではやむなく自宅で標本の整理をするか、県内に限定して徘徊するしかない有様です。先日は片道1時間半の山登りをしてキリシマミドリシジミの卵を探しに行きましたが、杉林の急登ですぐにへばり、体力の著しい低下を思い知らされました。またハードな採集に耐えうる体力づくりに励まないといかんと思いなおした次第です。【M】

春はもうすぐです！

Butterflies Newsletter No.81（2021 March 31）

発行：日本蝶類学会　〒113-0001 東京都文京区白山1-13-7　アクア白山ビル5F

勝美印刷（株）内　「日本蝶類学会」事務局　TEL 03-3812-5223/Fax 03-3816-1561

E-mail; bsj@shobix.co.jp　郵便振替口座　00170-1-334608　日本蝶類学会